

酪農業を営む

看護師の取り組み

＝Think Globally, Act Locally＝

地球的規模のレベルで考えて、地域レベルで行動しよう

最近、私のライフスタイルと看護活動について講演する機会が何度かあります。看護学生を相手に講演する時には、私は次のような気持ちで話しています。

大きな夢と希望を持って看護師としての第一歩を踏み出す学生たちは、救急看護、手術室勤務、周産期看護、地域看護、国際看護、精神科病棟やホスピス病棟での看護など、活躍する分野はそれぞれです。私の国際支援活動や「キャンナス釧路」の地域活動を知ってもらい、少しでも若い学生たちの力となれればと願っています。ナイチンゲールの心を、私も微力ながら後世につないでいきたいのです。私からのささやかなエールを届けたい気持ちです。

以前、ある大学で講義した時、「酪農をしながら看護師をしていて、看護技術は落ちませんか？」と質問を受けました。日々の医療の進歩により、治療技術や医療機器の変化は当然あります。看護の基本は、古今東西変わることはありません。看護の基礎をしっかりと身に付け、看護の心を忘れずに行動すれば、いかなる現場であっても対応できるものと私は考えます。

しかし、かくいう私も病院という組織に所属していない分、自己研鑽(さん)は人一倍重要です。移住前の勤務経験を生かしながらも、自分一人で看護技術を維持、向上させていくには、常に研修や訓練に参加し、専門書を読んで知識を深め、納得のいく看護を心がけています。

2年ほど前、在宅のがん末期患者を前に、いかなる看護が望ましいか、図書館で専門の医学書を探しました。しかし一般の図書館では医学に関する専門文献は少なく、また高い医学書を何冊も購入することなど叶(かな)わず、病院や医大の付属図書館で閲覧できないか考えました。

釧路管内には医大がないので、唯一病院で図書館を持つ釧路市立病院に閲覧希望の問い合わせをしてみました。しかし、入館、閲覧は病院の職員に限られており、私のような一般利用は認められませんでした。そこで、交渉してくださったのが、在宅療養を連携したK医師でした。医療従事者として知識や技術を共有し在宅療養患者に質の良い看護を提供したい、という私の思いを上司に掛け合ってくれました。その結果、K医師の名の下で医学書の閲覧や参考文献の複写も可能となったのです。おかげで受け持ち患者の治療方針の詳細や今後の見

全国訪問ボランティアナースの会
「キャンナス釧路」竹内 美妃 代表



(国際緊急援助隊医療チーム登録
看護師・酪農家) 竹内牧場代表

の家族への第一声は、決まって「牛はどう？」です。同じチームの隊員たちに笑われますが、牛たちのおかげで私の生活は成り立っているのです。

私は、地域に暮らす人々と同じ生業を営んでいますから、同じ目線に立って地域で必要な看護を見極め、提供できると考えています。また、酪農業という大自然と共存した人間の暮らしの中で、私の視野も広がってきました。

地域看護と国際看護を相乗効果としていくことが、私にとって今後の大切な課題です。より極めた専門の看護技術を習得し、自分の目指す看護の理論的裏付けを得るため、私は4月から日本赤十字北海道看護大学大学院で国際看護学、災害看護学を学ぶことにしました。

1月には第1回世界災害看護学会が、「災害がつなぐ地球人の絆」をテーマに日本で初めて開催されました。私も参加しました。これまでの災害看護に対する多くの研究発表や討論会を通して、今後の看護活動に役立てていけたらと考えています。

「Think Globally, Act Locally—地球的規模のレベルで考えて、地域レベルで行動しよう」。自分は一地球市民として世界で何ができるのか、そして今を暮らす地域では何ができるのか、私は酪農業を営みながら暮らす看護師として、地域でじっくりと腰を据えながら、自分の身の丈にあった活動をこれからも展開し、後世のさらなる看護界の発展に貢献していきたいと思っています。

これまでの連載への応援、本当にありがとうございました。(おわり)



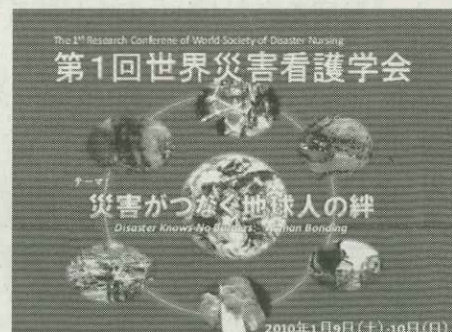
20年6月のミャンマーサイクロン支援での国際緊急援助隊医療チームとしての活動。左端が筆者(写真提供 JICA)

事者が希望すれば、柔軟に利用できる医学図書館の開放が、今後必要になってくると思います。

どんな状況にあっても、そこに人が暮らしているかぎり、看護の仕事は必ず必要です。自己研鑽が厳しいと思われる環境でも、自らが学びたいと思えば、必ず道は開かれると思っています。

私は今、酪農業を営みながら、合間を縫って地域看護と国際看護の活動をしています。一見、看護師の仕事とはかけ離れて見える酪農業ですが、共通部分は多々あります。患者を看るように牛を観察することで、牛の健康は維持できていると思っています。

国際支援活動をしている時も、やはり牛のことが気になります。被災地では、一度は家族に連絡を入れるように衛星電話を渡されます。私



第1回世界災害看護学会が9、10日に神戸国際会議場で開かれた